



第3回 COE国際シンポジウム・プレシンポジウム
若手研究者ワークショップ

「手段としての『非文字』 資料と方法のあいだ」 を終えて

王 京 (PD研究員・ワークショップ実行委員会委員)

本プログラムは若手研究者の育成という目的のもと、各年度PD、RA研究員を募集してきた。我々は研究員としてそれぞれ各自従来の研究を続けながら所定の業務を完成し、プログラムの個別研究課題にも積極的に関わってきた。そして一丸となって自主的な研究活動を展開することをかねてから希望しており、海外派遣報告会など幾つかの試みもあった。いよいよプログラムがフィナーレを迎えた今年度、元・現任を含めPD、RA経験者を中心に日ごろの思考の一部を報告、議論し広く意見を伺う案が浮上した。先生や職員の方々の積極的なサポートを得て、若手研究者ワークショップは去る1月26日に開催された次第である。

本ワークショップのタイトルは「手段としての『非文字』 資料と方法のあいだ」である。抽象的なことを並べているが、意図するところは簡単である。「手段」とは、ここでは目標を達成させるための「ツール (Tool)」よりも、目的地に辿りつく「ウェイ (Way)」というイメージに近い。各自それぞれ格闘している「現場」に即して具体的な目的と、そのための「非文字」理解及び資料化の作法や効果などについて反省を行い、さらにその結果を持ち寄り議論する。このような作業を通して「非文字」の方法としての意味と、資料化するプロセスについて考えるのが我々の姿勢である。

セッション1「絵画を読み解く」では、場面を切り取り再構成するか(彭偉文「記録手段としての絵画『姑蘇繁華図』に描かれた女性を例として」)、構図の物語性を重視するか(佐々木弘美「絵画の構図をよむ 一遍聖絵の場合」)という着眼の違いがあるものの、ともに美術史的視点とは異なる、社会・文化・歴史資料としての絵画への読み方の可能性が提示された。

セッション2「フィールドで考える」においては、まず我々研究者自身が写真資料の生産者である事実



意を払い、フィールド調査で撮影した写真を「群」として生活の構造及び変遷を提示する手法(土田拓「調査写真の性格と用法 景観の中のコンクリートブロック」)、或いはそれらを資料化するための基礎作業としてのキャプションの規格化(櫻村賢二「調査写真の資料化 韓国のオートバイ宅配便調査を事例に」)などが提言された。そして社会調査によって言語に対する人々の評価を数値化して分析する可能性が示された(宮本大輔「非文字と言語 北京大学生の言語イメージを通して」)

セッション3「博物館から展望する」では、モノと人



と、その背後の精神世界や地域という場との関係に注目する展示の可能性（大西万知子「感性を展示すること 英国と日本の事例から」）、そして博物館そのものの性格が国民国家の表象から多様な文化的背景をもつ人々が交流し対話する場へと変わりつつある動き（丸山泰明「21世紀における博物館の可能性 北欧で考えた二、三のこと」）が指摘された。

ご自分の「現場」での経験を交え、懇切なコメントを寄せてくださった香月洋一郎、北原系子、青木俊也の諸先生を始め、冬の寒い週末にもかかわらずわざわざご来場いただいた多くの先生や同学に心より感謝の意を表したい。皆様に暖かく見守られた中で我々のささやかな試みが充実した楽しい経験となった。

研究というのは我々にとって、個々の地道な努力と不断の反省は勿論、つねに仲間との横の交流と共同作業も必要とするものである。今回のワークショップで我々はようやく長い旅路への第一歩を踏み出したと実感している。

なお、当日の参加者は59名、内訳はCOE関係者29名、学内20名、学外10名であった。



COE 調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく、今年度のCOE調査研究協力者として追加委嘱された方です。

氏名	所属部局・職名	所属課題班
泉 雅博 IZUMI masahiro	跡見学園女子大学・教授	『日本近世・近代生活絵引』の編纂

COE 支援事務担当

12月より下記の事務員が新しく加わりました。



佐藤 留実子
SATO Rumiko

主に経理業務を担当します。よろしくお願いたします。

編集後記

この3月で5年間のCOEプロジェクトも終了、ニュースレターも本19号をもって最終号となります。このプロジェクトの紙媒体の業績に関して本号にページを割いて紹介しました。ここにニュースレター全号も示していますが、19冊の刊行の作業に協力いただいたすべての方に御礼申し上げます。（香月）

関さんから受け継いだバトンを無事ゴールに運べてほっとしています。ご協力いただいた皆さん、記念すべき最終号の表紙を飾って下さった西村さん、創刊号から最終号まで本誌デザインを担当して下さいました田田さん、本当にありがとうございました！（藤本）

今回の最終号も、先生方や研究員の方々にご協力いただき無事発行することができました。なにより仕事を通じてたくさんの方々との交流を持てたことが一番嬉しく思います。短い期間でしたがありがとうございました。（関屋）